経営改革を進める日本スピンドル製造株式会社の工場見学と社長講話　～第9回社長懇話会記録～

◆社長懇話会

ATACの行事として平成15年以来年に2回のペースで開催してきていますが、今回(平成19年7月20日)で9回目を数え、すっかり定着した感があります。

今回は企業経営者24名とATACからも10数名参加し、日本スピンドル製造㈱にお願いして工場見学をさせていただきました。当社は2年前のJR福知山線事故の際に齊藤十内社長の指揮の下にいち早く全社一丸となって救援活動を行なって世間の賞賛を浴びたことは記憶に新しいところと思います。齊藤社長にはこのときの経験談をATAC15周年記念講演会(平成16年10月)で話していただき、感銘を受けましたが、今回は同社の経営改革について講演していただきました。

◆工場見学

最初に工場概況の説明を受けました。大正7年に紡績機械の部品であるスピンドルを国産化して社名としたが、現在は、産業機械、大型集塵装置、空調システム、教育・福祉の4部門からなり、各種のテストプラントやデモプラントを擁している。敷地53,000m²、従業員350名、年商185億円(連結、平成19年3月期)の規模であるとの説明の後、工場見学に移りました。

最初に工場に隣接したJR事故現場を訪れて全員で哀悼の意を捧げました。

建材工場はこの工場で唯一の量産部門で、薄鋼板を成形し、間仕切りや引き戸用の扉やレールに組み立てていました。

空調工場では、クリーンルーム内の精密温調の試験室(サーマルキューブ)を見ました。クリーン度100、温度±0.1℃で、用途は液晶、半導体の測長・検査用です。

産業機械の大型工場では、回転しながら塑性加工を行うスピニング加工機やフローフォーミングマシンを組み立て中でした。大物は自動車アルミホイールの加工、小物では自動車触媒コンバーターの両端絞り加工、食器・照明器具用のアルミ板成形加工などに使われます。ロールフォーミング･センターではスピニング加工機の大小のデモプラントで自動車のドラムクラッチや触媒コンバーターの絞り加工を見学しました。

環境関係では、高さ25mのパルス式集塵装置のデモプラントや粉体輸送機のテストを見学しました。これらは現在製鉄所の集塵に活躍中とのことです。

最後に昨年5月に開講した技能塾でやすり掛けの実習を見学しました。選ばれた社員8名が、期間2年で座学6教科と実技(旋盤、きさげ、溶接など)を習得しており、来年の国家技能検定を目指しています。また、昨年10月には中級クラスを開講し、振動計、送風機などより高度なものに挑戦しています。

工場は隅々まで整理整頓など5Sが行き届いていて，上記救済活動で必要な道具がすぐ持ち出せたことが実感できました。

◆齊藤社長の講話

ホテルニューアルカイックで齊藤社長が取り組んでこられた経営改革に関する講演を聴きました。

2004年の社長就任以来、赤字脱却の3ヵ年計画を実行し、2006年3月期に黒字化と11年振りの復配を果たしたこと、本年3月期決算は不採算部門の整理と重点分野への移行で、売上げは減ったが利益率が向上したこと、また2社を吸収合併して業容を拡大中であることなど近況のほか、2010年を目標にした新経営ビジョンを打ち出し、3ヶ条からなる経営理念と5項目から成る行動基準を策定し、自らの経営課題として部下に率先して取り組んでいるとの説明がありました。

また、今後は人材の補強に力を入れる、経営はいい人材を集めることに尽きる、その一環として技能塾を始めた、また、開発･設備投資にも注力し、量産と違う付加価値の高い仕事に注力しつつあり、今は過渡期などとの説明がありました。

これからのトップの役割として、検査と診断、手術、治療、モチベーション、教育、事業強化･強い営業力、事業構造転換･シナジー効果を挙げられました。

以上の講話に対して、参加者から、教育、人事評価制度、日本スピンドルの歴史と社風、注力製品など活発な質疑応答がなされました。

◆懇親会

恒例の懇親会は日本スピンドル製造から10名近い幹部も加わり、盛会でした。

参加者から日本スピンドル製造への相談や、参加者同士の懇談など、参加企業の今後の活動に寄与しそうな話題も多数出た模様で、多くの参加者から参考になったと喜ばれました。主催者側としても有意義な一日であったことを喜んでいます。

（池田・吉田記）